片柳榮一教授論文『『もののあわれ』の近代日本における変異
――三島由紀夫の場合への批判的神学的視点」へのレスポンス

安　允　基
ナグネ（洛雲海）訳

第一〇回韓日神学者学術会議のテーマは「アジアの人間観と神学的人間観――21世紀における人間性回復のための統全的収斂」であり、このテーマにふさわしく片柳教授は「日本人の心の底にしみわたっている感情」を一つ紹介された。それは「無常に過ぎ行くそのことを、人は否応なく受け入れざるをえ」ないことであり、しかし「その諦めの静けさの中で、事態を受け入れていく時、不思議に、この過ぎ行く全体が、悲しみのうちで譬えようのない『美しさ』に包まれていることが見出される」ということである。この美的感動の概念が平安期以降、日本の文学において発展し続け、ついには江戸時代の本居宣長（一七三二―一八〇一）に達して、「もののあわれ」という用語をもって定着したということである。

この言葉に不慣れなため、論者はこの語に相当する韓国語を思い浮かべてみた。「あわれ（哀れ）」という語は韓国語でも哀傷、悲哀などのように使われ、他にも「鬱寂」とか、さらには純粋な韓国語「ウルコッ〈訳注：激した感情が込み上げてくるようす〉」などと似た意味として理解できそうである。そして、世の万物の無常を諦念として受け入れる

ことによる「あわれ」という感情、またそこから始まる「美」的体験は、西洋古代哲学者のアリストテレスが『詩学』において紹介した「カタルシス」（κάθαρσις）理論に似ているものと思われた。ただし「カタルシス」が、観客が悲劇という作品において登場人物の置かれた悲惨な状況を目にして、彼に「同情」を感じて自らを彼と同一視し、自分の心の中にあったしこりや悲しみといったものを解消することであるのに対して、日本人のもののあわれとは「もの（物）」から発生することであるがゆえに、それは単なる芸術作品というよりもはるかに幅広く広範囲な美的体験であることに違いない。

ここで一つお尋ねしたいことがある。「もののあはれ」の助詞「の」は、いかなる役割を果たしているかということである。所有格なのか、主格なのか。そうであれば、日本人はこの言葉をもって、あらゆる「もの」が「あわれという感情を持つ」とか「あわれだ」というような、一種の「物活論〈アニミズム〉」（animism）を考えるのだろうか。「日本には非常に多くの神がいる」とよく言われるが、このことも同様の文脈で見て取ることができるのかもしれない。しかし、韓国人は概して物活論〈アニミズム〉よりは唯物論（materialism）の方に親近感を感じるものである。あるいは、「の」は目的格としての役割をするのだろうか。つまり、世の万物を目にしながら、主体がそこに悲哀を感じるのであれば、「私のあわれ」と呼ぶことがより適合するであろうし、あえて「もの」が強調される必要はないように思われるのである。いずれにせよ、日本人特有の感情をもって言及された「もののあわれ」は、非常に興味深いものであった。

片柳教授によれば、日本人の内面に置かれてあるもののあわれは、一九世紀末、二〇世紀初めのヨーロッパにおけるデカダンス（décadence）、耽美主義（aestheticism）に出会って変異し花を咲かせる。このことを示してくれたのが三島由紀夫である。彼のデカダンスを代表する作品は『三熊野詣』（一九六五）であるが、そのあらすじを片柳教授は五段落にわたって紹介された後、その核心を次のように要約された。「虚構でもよいではないか。現実など醜く、汚れ、

ぼろきれのようなものだ。その中で自らが作り出した『虚構』のうちに『美』が見いだされるなら、現実の『真理、真実』などよりずっと貴重である」。短編の主人公藤宮先生から感じられる深い悲哀が発展し、その上、事態の真理の良し悪しよりも美を産み出し尽くすことがより重視される態度、すなわち耽美主義、唯美主義へと突き進むことになったということである。

耽美主義は「美的価値をすこぶる強調する」という表面の裏で「真理を度外視する」といった態度を間接的に表す。論者にはその側面が興味深く思われるが、「真実は重要でない」と語る心中には「真実を直視したくない、無視したい」という願望が敷かれているようである。なぜそのような願いを持つのだろうか。現実は醜く不都合で悲しいもののようだからである。このことは、まるで外見に自信のない人が鏡を見たり写真を撮られたりすることを嫌うのと同じである。したがって、万物の無常を意識し、これを感じるもののあわれは、近代耽美主義とよく調和するのであり、三島由紀夫はその点を『三熊野詣』を通して見事に表現したのである。

また片柳教授は、三島の耽美主義がキルケゴールの思想と深く関連すると診断された。キルケゴールは『あれか、これか』において三つの生き方を提示した。すなわち、①美的実存（aesthetic existence）と②倫理的実存（ethical existence）と③宗教的実存（religious existence）の三つである。このうち「『世紀末デカダンス』の運動」においても貫かれている①美的実存は「可能性」を「現実性」より高いものと見なすのであるが、こうした態度をキルケゴールは「倦怠」「虚無」「失望」などの理由をもって低く評価し、「実存弁証法」（existential dialectic）によって、①→②→③と発展することを勧告したのであった。

ところが、三島は『あれか、これか』を読んで熟考した後、『裸体と衣装』という日記体の文章を通して突破口を開いた。彼が考えるには、「後悔」の気持ちは様々な可能性の中から一つを選び、現実性を作ることによって、その結果として伴う「もう一つの失われた可能性」のために生じることであるが、この後悔を避ける妙案として彼が考え出した

のは「全く選択しない」ということである。言い換えるなら、人生はたった一つしかないという（したがって、様々な可能性の中から一つだけを現実性として選び取らなければならないという）事実を受け入れず、最初から「選び取らないことを選び取り」、「可能性自体を選ぶ」ことが真の自由意志の発揮ということなのである。

論者は片柳教授の叙述を読みながら、こんな例を考えてみた。すなわち、今日外出する前に（a、bのうち）どちらの服を着て出かけようか、と私たちは考える。aを選択して、それを着て出かけて行ったところ、外ではその衣装のせいで何か不都合なことを経験することになるなら、「なぜbを着て来なかったのだろうか？」と後悔するに違いない。そして、これとは正反対の状況が起こる可能性もある。三島の提案はこうである。はじめから「服を着ないで、裸のまま家に留まっている可能性」を選択することもできるのではないか。これが「人生はたった一つしかない」という事実に背を向けながら、多様な可能性の中に自らを置く美的生き方を選び取ったことなのであり、その結果として現れるものが、三島の創作活動に登場する様々な分身であったといえよう。

三島が見せた立場（耽美主義、美的実存）について、片柳教授は、大きく二つの問題があると指摘する。

第一に、人生の一回性という悲劇的現実に背を向け、そこから逃避しようとした点。

第二に、他者を排除して自分だけの人生に留まった点。

そして、興味深いことに、片柳教授は神学的な代案をアウグスティヌスから探してこられた。アウグスティヌスが『告白録』第三巻で述べた「私は愛することを愛していた」（amare amabam）という文は、『トリスタンとイゾルデ』のような作品が見せる恋愛至上主義の嚆矢として知られており、この後者の作品から世紀末デカダンス、耽美主義は発源したのである。もちろん、「愛の対象」である兄弟よりは「愛するという行為」自体をよりよく知っていると話した

という点で、アウグスティヌスにおいても自我陶酔とかナルシシズム（narcissism）のような面貌が見出されもするのだが、彼には決定的な違いがあった。アウグスティヌスにおいては、愛への愛が自我陶酔に陥らず、自己超越の構造を持つのであり、ついには愛の原型かつ源泉である神へと到達することになるということを、片柳教授は看破されるのである。なぜなら、宗教的洞察によれば、神は人間の魂の内なるところよりももっと内に（interior intimo meo）おられるが故に、愛を通して自らの内奥深くに入り込んだ人間は、結局は「自己の内なる『他なるもの』へと人間は、自らを越えて出て行」くことになるからである。論者の目からすると、これは逆説（paradox）であって、まさにこの点がキルケゴールの主張した「宗教的実存」に結びつく洞察に違いないのである。

こうして、片柳教授は三島が示した「恋愛至上主義のデカダンスに通じる『愛への愛』」とアウグスティヌスが見せた神学的愛を対照化するのである。前者は自己陶酔に陥って結局は自我消滅へと突き進んでいく反面、後者には自己の自覚を持ち続けるといった長所がある。また、現代精神の荒野にあって飢え渇望する人々に対し、三島が幻の糧と水を与えるのに反して、キリスト教的観点は人々をして自らを超えた他なるもの、すなわち神に出会わせ、ついには真の自己の姿をありのまま受け入れるようにしてくれるであろうことを提案するのである。

全体として、片柳教授のこの論文は、非常に興味深い内容が一目瞭然な仕方でうまく叙述されたものであり、読者に深い教えと楽しさとを与えてくれるものであった。論者は今回この機会を通して、①日本の美学の核心概念である「モノノアワレ」、②その概念の近代的変異としての「耽美主義」、③日本の耽美主義を代表する作家数人を新たに知ることとなった。そして、三島由紀夫の作品『金閣寺』（一九五六）や『春の雪』（一九六九）を読み直して、理解する機会を得た。

三島の耽美主義を片柳教授が分析されるにあたって、キルケゴールの論じた三つの実存様式の枠組みを用いられたことは非常に適切なものであった。おかげで、私たちは多少荒唐無稽にも感じられる三島の「現実無視」なる主張を正確

に診断することができたのである。

さらに、片柳教授はキリスト教的立場を代表するアウグスティヌスの「愛」に関する分析を通して、三島の耽美主義が産み出す否定的な結果を克服し、究極的に「もののあわれ」という根源的な感情に応える一つの代案を提示されたのである。内面の深いところにおいて超越的に出会う絶対他者としての神が、いかにしてもののあわれといった悲しい感情を慰め、また癒やすことができるのか、次の機会に話を聞けることを願い、期待したく思う。